

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 夏秋果菜類の栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○夏秋果菜類の栽培管理 ○いちごの炭疽病防除 ○冬春野菜の太陽熱利用による土壌消毒法 ○さといもの梅雨明け後のかん水管理 <p>ア ほ場の排水対策</p> <p>果菜類の根は、一般に酸素要求量が多い。降雨が続いて土壌が水分過多になると気相率が低くなり、根の活力が低下しやすい。排水性の悪いほ場へ、梅雨終盤に大雨が降ると、湿害になる可能性がある。このため、畝間やほ場の周辺を点検し、雨水がすみやかに排水されるよう明きよなどを整備しておく。</p> <p>イ 敷きワラによる地温抑制</p> <p>梅雨明け後は日射量が増大し、高温・乾燥状態が続くため、株元にワラを5cm程度の厚さで敷き、地温上昇を防ぐ。</p> <p>早い作型の果菜類では、茎葉が繁茂して株元に直射日光が当たらず、比較的地温は上がりにくい。しかし、定植直後の果菜類では畝に直射日光が当たり、地温が上昇しやすいため、敷きワラの効果が高い。</p> <p>ウ 追肥</p> <p>夏秋栽培の果菜類では、収穫最盛期を迎えるため、肥切れさせないように肥培管理を徹底する。追肥は7～10日間隔で、1回当たりチッ素成分で2～3kg/10aを目安とし、草勢により時期や量を加減する。粒状肥料を追肥する場合は、乾燥した土壌では肥効が期待できないため、施用後にかん水する。</p> <p>エ 摘果</p> <p>着果負担を軽減して草勢維持を図るために、果形を見ながら摘果していく。</p> <p>きゅうりでは、商品価値の低い曲がり果等を早めに摘果することで茎葉の伸長が良くなり、着果促進にもつながる。</p> <p>オ 病虫害防除</p> <p>多湿条件下では、疫病、灰色かび病、軟腐病、褐斑病、葉か</p>

項 目	作 業 内 容
(2) いちごの炭疽病防除	<p>び病、べと病、炭疽病、斑点細菌病等が発生しやすいので、早期防除に努める。また、病葉や老化葉は天気の良い日に適宜除去し、通風や採光を改善する。</p> <p>生育初期にアブラムシ類、スリップス類、コナジラミに寄生されると、虫媒伝染性のウイルス病に罹る可能性がある。このため、定植時の粒剤施用やほ場周辺の雑草防除を励行する。今後、早い作型の果菜類の近くに、新たな同種果菜類を植えると、虫媒伝染によるウイルス病害を受けやすいため、なるべく離れたほ場を選定する。</p> <p>感染株を早期発見・除去する、定期的に薬剤防除するなど、炭疽病の発生及びまん延を防ぐ。</p> <p>ア 感染株の早期発見・除去</p> <p>(ア) 発病初期にはランナーや葉柄に、両端が明瞭にくぼんだ黒色の斑点が見られる(写真1左)。葉にうすい黒色のシミ状斑点を生じた頃には、胞子はすでに周囲へ飛び散って二次伝染(まん延開始)している。</p> <p>(イ) 株全体が萎れた株のクラウン部を切ると、不整形な褐色の腐敗が見られる。</p> <p>イ 防除対策</p> <p>(ア) 炭疽病に罹病していない健全な親株を準備する。親株床は今まで炭疽病が発生していないほ場を使うか、親株床を土壌消毒しておく。</p> <p>(イ) 苗床をよく観察し、炭疽病の症状が見られる苗はただちに処分する。罹病株をそのまま放置すると、周囲の株に感染し、壊滅的な被害になることがある。</p> <p>(ウ) 多肥や過かん水による多湿を避け、株を健全に保つ。</p> <p>(エ) 降雨前後を中心に定期的に薬剤散布し、発病とまん延を抑制する。発病前は予防的な薬剤、発病後は治療効果のある薬剤を主体とし、作用性の異なる剤をローテーションする。</p> <p>(オ) 雨よけハウスを利用し、炭疽病まん延抑制効果の高い底面給水育苗システムの導入を図る(写真2)。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 冬春施設野菜の太陽熱利用による土壌消毒法</p>	<div data-bbox="531 293 1337 613" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="751 620 1123 651">写真1 いちご炭疽病の病徴</p> <p data-bbox="676 667 1198 698">左：発病初期（葉、葉柄）、右：萎凋症状</p> <div data-bbox="699 712 1177 1010" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="699 1016 1177 1048">写真2 愛媛農水研方式底面給水育苗</p> <p data-bbox="491 1108 1390 1240">冬春施設野菜では、栽培終了後に太陽熱消毒を行うことで、土壌伝染性の病原菌、センチュウ類、雑草類の種子を死滅させることができる。梅雨明け後～8月20日頃が適期である。</p> <p data-bbox="507 1256 628 1288">(手 順)</p> <p data-bbox="507 1303 1374 1435">(ア) ほ場全体に有機物（切りワラ、緑肥作物等）を10 a当たり1～2 t施用し、石灰チッ素を100 kg/10 a全面施用する。</p> <p data-bbox="507 1451 1374 1527">(イ) ほ場全体を深く耕うんし、畝幅70 cm、高さ25 cm程度の畝を立てる。</p> <p data-bbox="507 1543 1358 1619">(ウ) 畝間に水を引き、畝全体に水分が浸透するよう湛水する。</p> <p data-bbox="507 1635 1353 1711">(エ) 透明な古ビニルでハウス内の地表を全面被覆し、周りを土で押さえて密閉する。</p> <p data-bbox="507 1727 1369 1803">(オ) ハウス全体をビニルで被覆して密閉し、20～30日間静置する。</p> <p data-bbox="507 1818 1326 1910">(カ) 処理後はハウスを開放し、土壌被覆のビニルを除去後、土壌を乾燥させる。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(4) さといもの 梅雨明け後 のかん水管 理</p>	<p>(注意点)</p> <p>(ア) 効果を高めるため、処理期間中は土壌を乾燥させないようにする。</p> <p>(イ) 晴天が続くと、ハウス内は高温となりチッ素分解の過程で有毒ガスも発生するため、ハウス内へは立ち入らない。</p> <p>(ウ) 20 cm までの深さの地温が 40℃以上になる必要がある(糸状菌は 45℃、6 日間で死滅する。しかし、地中深くに生息する細菌等への効果は低い)。</p> <p>(エ) 有機物等の施用ムラや耕うんムラ、地表面及びハウスの密閉不足等は消毒ムラの原因となる。</p> <p>(オ) 機械や配管等は、ハウス密閉時の高温によって故障・変形することがあるので、あらかじめハウス外に持ち出す等の対策をとる。</p> <p>(カ) 処理後は pH、EC、無機チッ素を測定し、pH 矯正等を行う。</p> <p>(キ) 処理後の耕起作業は、再汚染しないよう慎重に実施する。</p> <p>さといものは多くの水を必要とする作物であり、特に、地上部の生育が最大となる 8 月中下旬までは土壌を乾燥させない管理が重要である。植物体の水分が不足すると、下位葉から順に葉焼け症状を呈し、芋の肥大に影響を与える。</p> <p>梅雨明け後は、土壌を乾燥させないように畝間かん水を行う。かん水頻度は、晴天が続く場合は 3 日に 1 回程度とする。夕方の涼しくなった時間帯から入水し、翌朝には水が引いている状態が望ましい (根痛み防止)。</p> <p>※昨年度は多くの地域で葉焼け症状が見られた (写真 3)。その結果、ひ孫芋の生育に影響が出た可能性がある。</p> <p>※今年度は生育が遅れていることから、葉焼けをさせない。</p>



写真3 さといもほ場

左：葉焼けした茎葉、右：正常な茎葉

(作成 農林水産研究所)